

図書館通信 —58—

1981. 12

〈図書館への期待〉

出会いの場として

北原和夫

一昨年より図書館の三階に自然科学系の学術雑誌のかなりの部分が学内から集められて置かれるようになった。私個人としては、広い分野の雑誌を一つの場所で手にすることができるようになって、有難く思っている。以前のように文献を求めて歩きまわる労が少なく済むようになった。また、図書館の職員の方々の努力により、浜松の図書館で購入している雑誌の目次の情報サービスも部分的にはあるが行われるようになり、文献調べに浜松まで足を運ばすことも少なくて済むようになった。

この学内の雑誌の集中化を進める際に、いろいろな考え方があった。学術情報センターとして図書館を位置づけて行くという全国的な趨勢もある。また、学内の各教室でバラバラに重複して購読している雑誌を整理統合することにより、雑誌代の負担を軽減して研究費を充実させたい、という意向もあった。出版される雑誌の種類数は現在益々増加しつつあり、また、雑誌の値段は年々上昇している。従って文献検索の効率化という問題と雑誌購入費用と研究費のバランスという問題に現在我々は直面していると言えよう。

私は、もっと長期的に見て、やはり学術雑誌が図書館に揃っていることが、大学にとって大切なことではないだろうか、と考えるのである。先ず第一に、私の関係する分野の雑誌だけを研究室の机の上に置いておくことにしたら、恐らく、私の研究分野の幅が広がることがないであろうし、他の人がその雑誌に目を通す機会を失わしめるであろう。一見、無駄足のようにあっても、雑誌の揃っている場所へ足を向けていろいろな文献を眺めているうちに、他の分野との関わりあいが生まれるのではないだろうか。さらに、図書館にしばしば

出入りして互いに顔を合わせている人々の間に、学問との関わりにおける共通基盤が自然に醸成され、相互理解が生まれてくるのではないだろうか。考えてみると、いろいろな学内行政に関する委員会や会議で他の学部や他の教室の人々と一緒になることはあっても、学問そのものとの関わりで共に足を運び出会う場というものは意外と少ないように思う。そういう意味で、学問を荷う人々が出会う場として、図書館は大学の研究教育にとって大変重要な存在である。幸い、図書館（東部）は教養部、理学部、教育学部に近接していて、ほぼキャンパスの中央に位置しており、大いに、「出会いの場」としての意味を発揮して欲しいと思う。そのためにも、学術雑誌がもっと揃えられていることが望ましい。また、図書館の入口の新聞閲覧室のところの掲示板に学内外の講演会やセミナーの案内が張出されていることは大変良いことであると思う。これも、「出会いの場」として大事なことである。

学術雑誌のことを中心に、研究する者の立場で図書館への期待を述べてみたが、恐らく、これは学生諸君にとってもあてはまることであろう。図書館に出入りしていろいろな書物、雑誌に触れて視野を広めることは重要なことである。図書館がそういう目的にかなうように運営されるようにと期待している。
(教養部・物理学)

休館

56年12月21日(月)～57年1月4日(月)

延長開館の休止

57年1月5日(火)～1月9日(土)

法経短大図書室は改築工事のため、56年12月より57年4月上旬まで閉鎖します。

〈図書館への期待〉

図書館は博物館になる

広 田 文 彦

「万巻の書」を読むというのは多読の定型的表現になっているが、昔の一卷が新書判程度の分量であったことを思えば、実数としてもまんざら不可能ではない。日蓮は叡山にこもって万巻の経書を読み破ったという。我々が必要とする書物の量は日蓮の時代より桁ちがいに多いだろう。しかも世界中のあちこちで次々と現われる文献には誰だって泣かされる。もっとも全部は読めっこないから摘読となる。大部の本を通読するなんて贅沢は学生時代より後にはめったに味わえない。ある雑誌の一論文を読み、あの本は一節だけ眺め、こっちは本は表と図だけ見てまに合わせる。それでも私の机の上は、年に一度の大掃除の直後以外は、いつも雑然たる書類の山で、一たん何かが行方知れずになるとよほどの幸運にめぐまれない限りもう会えない。私だけ特別ルーズなのかと思っていたが、誰でも多かれ少かれこのエントロピーの悪魔に悩まされているとみえ、こういったものを機械に整理させようというシステムが実用化にむかって動き始めた。なまけ者にはありがたい面も多大だが、不安でさびしい感じも残る。文部省肝煎の「学術情報システム」もその一部であり、その他いくつかの情報検索システムは既に実用化されている。その便利さは一度これに慣れたら、従来の二次情報誌にたよった手順など二度とやる気はなくなる。一方、情報がいかに高価なものであるかも教えられた。

だが、現在のデータベースはあまりに制限が多い。データは標準化され、更に断片的なものである。こういう二次資料だけのシステムは過渡的なものであり、いずれは本一冊まるごとコンピュータにまかせるようになるだろう。書物はいらぬ。必要な時は端末にむかって「×について調べよ」と命ずればよい。エントロピーの悪魔との戦いは電話線の先のどこかにある巨大な機械にまかせよう。彼は与えられた情報を組織し様々な参照に応じると共に、新たな情報も生みだすだろう。プラトンと対話することだって可能となる。こうなれば図書館はそっくり博物館に変身する。これはSFではない、ヴィジョンというものだ！しかし何を感傷することがあろう。本の重さや手ざわり、新

しい本を手にした時の心おどる思い出、天井まで積みあげられた書架の傍でのやすらぎなどに郷愁を感じる我々の世代はいずれ遠からず地上から一掃され、「僕ナンカコレダケデスヨ」とポケット端末を示してみせる若者たちの時代がくる。現在の「テレビ世代」の後には「コンピュータ世代」の子供たちがくるという（林雄二郎『情報化社会』）。自然言語の解析など技術的に十五年、旧人類との闘争に十五年として三十年先には我々は幕を引こう。

いくら潔い覚悟をしていたところで、私の日々はちっとも楽にはならないから、図書館への希望は沢山ある。いまや情報収集はプロ（といってもスパイではない）の仕事である。研究の片手間というわけにはいかない。限定されたテーマについて月々図書館が情報提供してくれたら、研究者との結びつきは強固なものになるだろう。また過渡期の苦痛を抑えるための医学的な配慮も必要だろう、といっても講習会なぞまっぴら、新システムがいかに有効であるか実地に示してくれることがなによりで、図書館に20台位の端末を設置して自由につかわせるというのはどうだろうか。更に静大図書館独自のデータベースを開発すれば転生ということになる。静岡県統計や地誌に関するものは当然要請されるだろうが、他にも特殊な分野のそれ（例の「大型コレクション」みたいな）が出来れば、どこにでもある書物の山を築くよりずっと価値がある。私も加わっている「量子化学データベース」は極めてローカルな内容ではあるが、国家的規模の構想にはない緻密な内容をめざしている。ついでに宣伝しておく、この計画では文献や数値情報と共にそれを生みだすソフトをもベースに組み入れ、存在しないデータは必要に応じて作り出すという構想になっている。つまり好い加減な研究は淘汰されるだろう。人間に要求されることは機械にはできないことである。

いろいろ言ってみても、果して実現の可能性はとなると心細い。図書館に専門スタッフの数人はほしいところだが、だめなら通常サービスの大巾ダウンもやむをえないと私個人は思っている。またエントロピーの悪魔が能率のオバケに変るだけではたまらない。情報の収集も楽しみの一つであり、時には誤りや逸脱があつてそれが新たな発展につながる、なんてこともあつていい。情報システムがそういったことを許容する柔軟さを持つには我々亡びゆく旧人類の抵抗が必要なのかも知れない。

(教育学部・化学)

〈図書館への期待〉

勤労青年学生と図書館

平 田 良

高度経済成長期を経て中堅技術者達は、科学技術の革新とともに自分の知識が急速に老朽化するのを痛感した。その声は多くの国立短大教員達の耳にも入り、国立大学夜間短大の教育を社会的要望に対応させなければならぬと認識させ、労働者の再教育を新しい課題として取り上げさせた。

“生涯学習”という言葉が聞かれるようになったのも、ほぼ同じ頃からと思う。それは、労働者の再教育というように明確な目標を持ってはいないが、同様に科学技術の急速な進展と労働者の生活に生じた多少の余裕とを反映した社会的な新現象といえるのではなかろうか。

教育に対するこのような要求は、一般的な労働者にとって殆ど無縁であった図書館に対しても、矢張りそれなりの要望を生み出すであろう。そして図書館のあり方にも、或る変化が起るかもしれない。

静大法経短大の学生は、全員が就職しているというて良い。殆どの学生は勤務を終えてから駆けつけてくる。時には、授業を終えてから三交替制の夜勤に出てゆく。そうした諸君にとって、図書館は些かなじみにくい所の1つである。

何よりも、彼等には自由な時間が極めて乏しいのだ。普通の企業は午後5時終業の規則だが、従業員が退社できるのは早くても5時半頃からである。嫌味を言われながら一番早く退社しても、6時からの授業にはギリギリだ。1・2時限目は7時20分までだが幾分早目に終わる。しかし、夕食を急がなければ30分からの3・4時限目に遅刻する。授業は9時に終わるが、9時4分発のバスに乗りおけるとセンターからの乗継ぎができなくなる。

つまり図書館に顔出し出来る時間は受講しない空き時間か、休講の時だけなのだが、そのような時にこそ、ゆっくり夕食も喰べ、おしゃべりもしたくろう。だから、廊下を歩きながら、一歩だけ寄り道をすれば本を借りたり返したり出来るというような図書館・図書室こそ、まず第1に必要なものとなる。またどんなに充実した図書館でも、手続きと時間とをかけずに本が借出せなければ利用はできない。

こうした、いわば物理的な条件とならんで、法経短大の学生達の勉学目的も、相応の要求を生むだろう。学生諸君の勉学目的も、創立当時(1952年)と今日とでは随分変っている。当時は、学徒出陣で高等学校や高等専門学校の在学中に徴兵され、敗戦後の混乱で学業を中途にして就職した人も多く、この人々は、働らきながら短大を卒業出来れば、復学したのと同じ資格がえられることになった。大学進学率も低かった当時では、旧高専＝短大卒の資格も人を中級技術者にする評価であった。だから、旧制の中学校(今日の高校)卒業のまま就職していた人々にも、国立短大への進学には実利的な魅力もあった。しかし何よりも、当時の大学には、かつて禁じられていた思想や学問があり、それを学び取る喜びがあった。だから、勤労青年達は、コッペパンを噛りながら、時には怪しげな焼酎をなめながら、裸電球がともる暗い道を通って寒風が吹抜けるバラック建の教室に集ってきた。暖房は勿論なかった。

こうした空気は、矢張り高度成長期を経て変ってきた。大学進学率は急速に高まり、大学卒の資格も格別のものではなくなってきた。サラリーマンの中で高校卒が一番低い学歴になってくると、4年制大学への進学をあきらめた人々にとって、短大への進学は次善の選択でしかなくなる。私は先年ある学生に言われた。“先生、1日中仕事をした上で通学するのは、学校に行くとか何か楽しいことがある、という期待が必要ではないですか”と。いまや“何か楽しいこと”は勉強の中に期待されているのではない。彼は勉強がつまらないと言っているわけではないが、しかし思想を学ぶことに情熱をもっているとは言い難い。彼の余暇を文化的に、賢明に楽しもうというのではないか、と思われる。

勤労青年の夜間大学教育は、一面ではこのような“生涯学習”的な期待とも無縁ではありえなくなっているように思われる。すでに放送大学も第一歩を踏み出している。こうなると、研究調査に役立つことを目的とする図書館とは異なる役割を学生達が求めるようになりはしないか。研究調査資料が整備されるよりは、学習・教育に役立つ機能の整備が求められ、文化センター的な機能の拡充が求められるのではなかろうか。また、所蔵される資料類も、図書だけではなく、VTRやオーディオ・テープ等の視聴覚全般にわたるものが必要になると思う。最後に、館内での利用だけでなく、館外への貸出しの拡張が必要になるかと思われる。

(法経短期大学部・経済学)

〈私のすすめたい本〉

『生物社会の論理』

伊藤 忠夫

昔、植物の好きな同級生からすすめられて読んだのであるが、表記の今西錦司著(1958)陸水社と、最近、生態学、造林学に関連して興味をもたれた二、三の本について紹介する。

私は今年の2月に静岡大学へ転勤してきたが、お陰で南アルプスへは二度ほど入る機会を得た。南アルプスは緑が豊富であると聞かされていたがその通りで、二軒小屋から2,879mの千枚岳に登る途中は、ウラジロモミ (*Abies homolepis*)、コマツガ、トウヒ、シラビソ (*Abies veitchii*)、オオシラビソ (*Abies mariesii*) の鬱蒼とした林が連なり、樹木限界、森林限界とはいつてもほとんど頂上付近までハイマツやダケカンバなどの群落が見られた。しかも自然の秩序は見事なもので、山地帯から亜高山帯に標高が高まるにつれて、教科書通りの植生の配列、棲みわけが認められた。

今西の『生物社会の論理』*には、この棲みわけ *habitat segregation* について、カゲロウ幼虫の分布から得た種の社会及び同位社会というアイデアを、日本北アルプスのモミ属 (*Abies*) 社会に適用し、垂直分布帯の分別を明らかにし得た経緯が記されてある。さらに生物的自然としての景観的なものの見方から出発し、植物集団(共同体)をとり上げてきた CLEMENTS や SHELFORD (1939)、RAUNKIAER (1903、1907) 以来の生態学の流れや、CLEMENTS (1916) の大地域社会を前面に押し出して小地域社会を遷移説により淘汰し去った植物生態学の伝統などに対して、共同体を構成する究極的な単位としての種の社会をとり上げ、それを同位社会の棲みわけとして空間的に展開し、極相論までに至った著者の社会学の理論形成が克明にしかも情熱的に述べられている。学問的な評価は別としても、著者の体系的な自然観が、われわれの自然観形成や森林生態に対する周到な理解に益する所が大きいと思われる。一読をすすめたい。

さて、今西は生物的自然へのアプローチの仕方には共同体を単位とする立場と著者自身の種社会を単位とする二つの立場があり、その違いは分類あるいは総合と分析の違いであるとした。そしてそれは、大味なアメリカの自然と複雑な日本の自

然の相違に帰されると述べている。最近出版された NHK ブックス 312 の鈴木秀夫著『森林の思考・砂漠の思考』* は丁度このような内容に関連するもので興味深く読んだ。人間の思想・思考の歴史的發展に対する風土的理解についての論である。人間の思考や世界観には東西二様の様式があるが、その相違に対して森林の有無や変遷が宗教を媒介に大きくかわり、われわれのメンタリティを形成するという説である。

森林の民はまわりの樹木と真上の天を見上げる存在である。森林の民は地表の一点に定着し、自我が宇宙の中心となる。仏教はその思考の発展の上に形成されたものであるから、その思想的風土の中では真理とはつかむことが出来るもの、探求し得るものになる。科学を進める態度としては現象を視界の及ぶ範囲でたんねんに解析し、きちっと整理し組み立てていく立場をとる。森林の民の視点は下から上であり、科学者は分析的である。これに対して、砂漠の中では人は一点に定着して生活することは困難である。意識の中では常に鳥の高さで広域を見透す。きびしい環境のもとでは天地創造の唯一の神の恵みと意志により自らが存在する。天地万物について、神について完全な認識を持つことはあり得ないと考える。「われわれには物事がこう見える」としか言いようがない。それ故に反って何の遠慮もいらず大胆な大仮説、大理論を展開することが出来る。砂漠の民の視点は上から下に鳥瞰的であり、科学者は総合に長ずるとする。日本人の思考様式をみる時、今西社会学の展開をみる時、この説はもっともな気がする。

ところで、最近「砂漠緑化」の関係で中東方面へ出かける人が多い。当農学部永井衛先生も『静大だより第66号』にアラブ首長国連邦に出かけられた時の容子を記されている。清水正元著『砂漠に緑を』* 中公新書 445 (1976) は砂漠の環境、植物の生活型、砂漠の緑化技術等に対する研究プロジェクトの成果の記録である。専門分野からはそれ自体で興味深い、聖書に見る砂漠の歴史、砂漠と宗教、人間などにもふれている。宗教、言語、風俗、習慣、思考などの違いを克服して協力し合わなければならない時代に、基本の所で理解し合うことが重要となるが、そんな意味から後の二冊の本を紹介した。 (農学部・造林学)

*印は本館所蔵

私のすすめたくない本

眞 田 孝 昭

心理学は、日本人による独創的な学説が、きわめて少ない特殊な学問領域である。日本の心理学者の多くは、外国の学説のおかげで生活が成り立っているようなものである。もちろん、私もその非独創的な者の1人であることはいうまでもない。

このような事情から、毎月多数の翻訳書が出版されるのもやむをえないし、私たちがそれに頼らなければならなくなるのもやむをえないことである。さらに、今後、中学校で英語週3時間制がとられるようになると、おそらく演習で、英語の文献を使うなどということは不可能になるにちがいない。そうなると学生諸君は、語学そのものに時間をとられることなく、実験や観察、それに考えることにもっと時間が使えるようになるはずなので、それはそれで結構なこともあるかもしれないけれども、そうなるとますます、体系的理論やモノグラフの翻訳書の役割は重要になってくる。

ところが、現在、まことになげかわしいのは、読むだけ時間の無駄になるような本があまりに多いことである。かつて私は、ある心理学書の翻訳を読んで、理解できない時、その中に書かれていることがあまりにも深遠なため、私の頭ではついていけないのだと思っていた。ところが、教えるために仕方なく、心理学の中で私にとっては専門外の分野についても原典にあたってみると、私に理解できない部分のほとんどは誤訳と悪訳によるものであることが判明した。

たとえば、日本でよく知られて、一よく「読まれ」ているはずがないので一よく「買われ」ているものに、ピアジェの訳書がある。その中で特にひどいものは大伴氏の訳である。私は、亡くなられた方の悪口をいうのは好まないけれども、学生諸君がよく「読もうと思う」ようなので、あえていっておきたい。何故ひどくなったか、といえば、最大の原因はこの訳書がケンブリッジ版の英訳を底本としており、英語版は、原典と厚さを比較してみればすぐにわかる通り、各章数パラグラフが落されていることであろう。しかし、それだけではなく、英語からの訳としても日本語として全く意味不明のところが多々ある。まことに残念至極であるけれども、これでは、読もうとするだ

け無駄である。ピアジェ自身が難解なことをいっているわけでは決してない。唯一、ピアジェのもので、読むに値するのは、谷村・浜田訳『知能の誕生』*ミネルヴァ書房である。

さらに、昨年来日したスキナーも、ピアジェほどではないけれども、比較的日本ではよく知られている心理学者である。スキナー理論は、それほど難解であるとは思われないけれども、波多野進/加藤秀俊訳『自由への挑戦』*番町書房(原題は *Beyond Freedom and Dignity**)と犬田充訳『行動工学とはなにか』*佑学社(原題は *About Behaviorism**)は、何をいつているのかさっぱりわからない個所が多すぎて、読もうと努力するだけ時間の無駄というものである。私自身は、ラディカル・ビヘイビアリストではないけれども、スキナーを可愛想に思ってしまう。スキナー流の実験行動分析の専門家である某大学教授は、「いや、あの2冊の本は、全面的にわからないんだから、スキナーを誤解させないだけ罪は軽いというもんだ」と語っていたけれども、原著を読んだことのない買い手の側からみると、私は重大な罪だと思わざるをえない。

また、つい最近では、アメリカの心理学を知る上では、重要な書である T. W. ワン編『行動主義と現象学』岩崎学術出版社が出た。これは、コック、マクレオド、スキナー、ロジャース、マルコム、スクライベンといった、心理学者と哲学者によるシンポジウムをもとにしたものである。この書は、第4章のロジャースの論文を除くと、まことに読むにたえない。訳者たちが、内容を理解して訳したとはとても思えないのである。この本もしたがって、「読もう」とするだけ時間の無駄である。

書物以外の他の商品の場合には、消費者運動のおかげで、特に家電メーカーなどの場合、欠陥商品は、電話1本ですぐに交換にやってくる。書物の場合だけが、何故か問題にされないのはどうしたわけであろうか。翻訳書の世界というのはまことに奇妙な世界であり、良いものが売れるわけではないらしい。良いものとは、たとえば安田一郎氏の訳なる『行動主義とは何か』河出書房新社である。安田一郎氏の訳書は、完全に信用してよいものであるけれども、奇妙なことにそのほとんどが絶版である。かくして、学生諸君にすすめたい本というのは、ほとんど無くなってしまっているのである。

(人文学部・心理学)

*印は本館所蔵

■図書館委員会報告

○昭和 56 年度 第 3 回 S.56.9.22

議事

1. 昭和 56 年度外国雑誌購入費の予算の配分について審議し、原案を承認した。
2. 大学院学生の書庫内検索について審議し、当分の間、閲覧規程第 15 条の「特に館長又は分館長の許可を得た者」に該当させて試行する方向で検討することとした。
3. 「国立大学図書館間相互利用実施要項 (第 28 回国立大学図書館協議会総会 56.6.23 決定)」について説明があり、これを了承した。
引き続き、これに基づく「国立大学図書館間共通閲覧証」の本学図書館における取扱いについて審議し、原案の趣旨にそって措置することを承認した。

報告

1. 第 28 回国立大学図書館協議会総会の模様について報告があった。
2. 国立大学図書館協議会会長より文部大臣宛に提出された「学術情報システムの実現に関する要望について」の報告があった。

■教官著作寄贈図書 (本館)

黒羽清隆 (教育学部)

『文化史でまなぶ日本の歴史』 黒羽清隆著
地歴社 1981 (210.1/Ku 72)

後藤正夫 (農学部)

『新植物細菌病学』 後藤正夫著
ソフトサイエンス社 1981 (615.6/G 72)

志村鏡一郎 (教育学部・附属浜松中学校校長)

『子どもが生きる確かな授業——多様な学習活動と形成的評価——』

梶田叡一・静岡大学教育学部附属浜松中学校共著 第一法規 1981

(375/Ka 23)

高橋洋児 (法経短期大学部)

『物神性の解説——資本主義にとって人間とは何か——』 高橋洋児著 勁草書房 1981

(331.34/Ta 33 開架)

静岡県近代史研究会

『静岡県の自由民権運動』

(静岡県近代史研究叢書 2)

静岡県近代史研究会編 1981

(312.1/Sh 94 開架)

■浜松分館だより

外国雑誌の重複購入調整について

工学部キャンパスで重複購入している外国雑誌のうち、下記の 16 タイトルについては、1982 年分からは重複購入を中止することになりました。これらの新着誌はすべて閲覧室の雑誌コーナーに配架します。

TITLE

Applied Optics. (A) S-M
IEEE Journal of Solid State Circuits. (A) B-M
IEEE Transactions on Automatic Control. (A) B-M
IEEE Transactions on Biomedical Engineering. (A) M
IEEE Transactions on Circuit and Systems. (A) M
IEEE Transactions on Electron Devices. (A) M
IEEE Transactions on Microwave Theory and Techniques. (A) M
IEEE Transactions on Power Apparatus and Systems. (A) B-M
Journal of Optical Society of America. (A) M
Journal of Optimization Theory and its Applications. (A) M
Journal of Physics. Part E : Scientific Instruments. (E) M
Optics Letters. (A) M
Physics of Fluid. (A) M
Proceedings of the I. E. E. E. (A) M
Review of Scientific Instruments. (A) M
Solid State Electronics. (E) M

※(A)はアメリカ、(E)はイギリス、Mは月刊、B-Mは隔月刊、S-Mは月 2 回刊。

お知らせ

長期貸出

貸出冊数：4冊以内

貸出開始日：12月7日(月)

返却期限：57年1月13日(水)